鉱物と柑橘

[SFP0313]

Sudden Fiction Project

高階經啓
hirotakashina

「なぜそんなことをしなければならないのですか？」

　ムチャペイロの人々に質問をされて、はたと困った。なぜそんなことをしなければならないのか？　そんなこと、考えたこともなかった。楽しいから。面白いから。盛り上がるから。そうするものと決まっているから。ダメだ。そんなことではムチャペイロを納得させることはできない。理解できないものに出くわすと、ムチャペイロは猜疑の念にかられ、独特の香りを立てる。鍾乳洞にでもいるようなひやりとした鉱物の香り。いまがそうだ。警戒しているのだ。

「学校は将来役に立つ知識や技術を学ぶための場所だと理解しています。少なくとも将来他人と理解し合うために最低限の共通のルールや原則を身につけることが目的だと考えています」

　ムチャペイロ族はきわめて性格が真面目で、私利私欲がなく、言ってみれば民族まるごと優等生。教わることも大好きだし、教わったことを他人に教えることも大好きなので、大変理想的な学びの共同体がたちまち出現した。だから学校を運営するのに障害はほとんどない。ただ一点、遊び心に欠ける点を除いては。

　部活動でさえ彼らはなかなか理解してくれなかった。ムダだと言うのだ。教室だけでは飽き足りない知識欲をさらに追求したり、体育の時間では極めきれない運動能力を向上させたり、演奏能力や描写能力などそれぞれの得意分野を掘り下げ磨き上げる場なのだと説明してようやくムダではないと受け入れてくれた。ムチャペイロが納得するには、筋道の立った論理的な必要性があるものとして理解してもらわねばならない。

　「あなたたちの世界でも収穫の時期に祭りをやるでしょう？」

　ムチャペイロたちはうなずく。けれどもそれとこれがどういう関係があるのかという顔をしている。確かに、ムチャペイロの収穫祭は純粋に神様に感謝の気持ちを捧げる儀式であって、地球で行われているような祭りとは違う。仕事が休みになり、町なかに人が溢れ、屋台が出て、音楽や踊りやパレードがあってという、地球型の祭りはここにはない。考えてみたら我々はどうしてあんな祭りをやっているのだろう？

「地球では、その祭りに合わせて日常とは違う時空間をつくります」

　ほとんど口からでまかせに喋っているのだが、これは意外と本質的なことを言っているかもしれない。自分でもちらっとそう思い、話を続ける。　日頃はそれぞれに活動している学年やクラス、クラブなどが対外的に発表したり、交流したりすることで、組織に流動性を持たせ、新た

な活動の誕生を促す機会を年に一度くらい設定することは、学校全体を活性化させ、生徒・職員を含めてリフレッシュするためにも極めて有用なのだ……。

　ムチャペイロたちが得心行った時に出す汗のようなものの爽やかな柑橘系の香りが漂い始めた。ようやくわかってもらうことができたらしい。思いつくままにあれこれ言ってから気がついたが、地球においてもたぶん同じ理屈が語られているのだろう。わたしがたまたま考える機会がなかっただけで、きっと教育関係者は同じようなことを言っているに違いない。わたしはただ「楽しいから。面白いから。盛り上がるから。そうするものと決まっているから」くらいの理由で参加していたのだが。

＊　　＊　　＊

　かくしてムチャペイロの学校で初めて行われる行事が始まった。

　大多数のムチャペイロにとって、半信半疑の試みであることは、学校全体が鉱物質の香りで満たされていることからもわかる。無理をさせてしまったかなあと少々気弱になりながら見て回る。ムチャペイロの代表的なスポーツであるフリークライミングを体験するために校舎の側面がクライミング用のウォールに変身している。グラウンドにはクレーン車が乗り付けて、これまたムチャペイロの通過儀礼であるバンジージャンプのような空中ダイビングの機会を提供しているのが見える。

　わたしが勧めた演劇の行われている会場は、まさに鍾乳洞と化していた。舞台上も客席も疑問符だらけで、鉱物臭に満たされていた。ムチャペイロはまじめ過ぎるのだ。その光景はある意味すごく面白いとも言えたが、わたしは頭を抱えた。一方で化学や天体に関する発表は単純に知識欲を刺激するらしく非常に人気が高く、そこからは柑橘系の香りが溢れていてわたしを安心させた。ぶらぶらとグラウンドの方に行くと、意外なことが起きた。

「さあ、校長先生もどうぞ！」

　ムチャペイロが声を弾ませている？　初めて聞く生徒たちの興奮した声に押されて気がつくとわたしはクレーンの最上部へと上がるエレベーターに乗せられていた。勘弁してくれ。わたしはバンジージャンプなんかしたくない。しかし校長先生が飛ぶぞと聞きつけてムチャペイロの生徒たちも職員たちもわいわいとグラウンドに集まって来る。すごい群衆だ。ここで尻込みするわけにはいかない。ハーネスをつけてもらい、腹をくくって台の縁に立つ。

　思い切って宙に身を躍らせた。地面が近づくにつれてわたしははっきりとそれを感じることができた。いままで味わったことがないような、気持を引き立てる香り。複雑で豊かな柑橘系の香りの霧の中にわたしは飲み込まれて行った。ムチャペイロ最初の文化祭はどうやら成功のようだ

。

（「文化祭」ordered by koa16v-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro）

新作スタート。お題募集中。

2011年10月1日。
Sudden Fiction Projectの新作発表が始まりました。

1日1篇ペースをめざしていますが、これはどうなるかわかりません。
毎日、その日のお題を見て、いきなり書き始めていきなり書き終わる。
即興的に書くSudden Fictionをこれからお楽しみください。

お題募集中です。
「急募！お題」のコメント欄で受け付けています。
（お題の管理上、TwitterやFacebookでは見逃しがちなので、
　どうか上記コメント欄をご利用ください）

それではこれからしばらく新作のシーズンをお楽しみください。

鉱物と柑橘

http://p.booklog.jp/book/35526

著者 : hirotakashina
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/35526

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/35526

公開中のSudden Fiction Project作品一覧
http://p.booklog.jp/users/hirotakashina

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.